

形式と意味の研究

—テアル構文の2類型—

杉 村 泰

要 旨

テアル構文には「窓ガ/ヲ開けてある」のように、対象をガ格で表すものとヲ格で表すものがある。従来、両者には取りうる動詞や動作主の人称に違いがあり、しかも両者は一つの連続体をなしていることが指摘されてきた。本稿では、これらの違いが「NP ガ VP」「NP ヲ VP」という構文の特性に由来することを示す。つまりテアル構文は眼前の情景を描写するものと、行為の結果の有効性を描写するものがあり、各描写の特性が動詞や人称の違いに影響していると考えられるのである。その上で、話し手がその中間的な描写を行った場合を接点として、両者は連続体をなしていることを示す。従来テアルは「意志的行為の結果」を表すとされていた。しかし実際には非意志的行為の結果を表す表現も存在する。それらの表現を観察すると、本動詞アルに意味的に近接する場合に多く出現することが分かった。こういった現象も構文の特性に由来しているものと考えられる。

【キーワード】 テアル構文, 連続体, 意志性, 動作主の人称, 話し手の視点

1. はじめに

本稿はテアル構文の形式と意味について考察したものである。従来テアル表現全体に共通する意味特徴は、益岡(1987)も論じているように「意志的行為の結果に重点が置かれる『結果相』の表現」であるとされ、多くの研究によってその意味的・統語的構造が明らかにされてきた。しかし、細かい点においてはまた検討の余地があり、より精密な記述が可能であると思われる。

以下、先行研究の論点を整理し、テアル表現の各類型に見られる様々な特性が、構文の特性に由来していることを指摘する。

2. 先行研究の流れ

先行研究では、テアル構文に関して次に示すような、「対象ガ～テアル」と「対象ヲ～テアル」との違いが問題にされてきた。

- (1) (部屋の中を見回して) おや、窓が開けてあるぞ。
- (2) 風通しを良くするために、窓を開けてあるんです。

まず高橋(1969)の研究から見ていこう。

高橋はテアルを次の3種類に分類した。

- ① 目にみえるような形での状態をあらわす
 - (3) 夏のことで窓はあけはなたれ、細いよしすだれがそこへさげてる。(「暗夜行路」)
- ② 放任の状態をあらわす
 - (4) その仕事はかれにまかせてあります。
- ③ 準備のできた状態をあらわす
 - (5) 女中にまでロどめしてある。(「暗夜行路」)

そして次のような場合に「～ヲ～テアル」になることがあると指摘した。

- (a)うごきの間接対象の変化した状態を問題にするとき、(b)うごきの主体でも対象でもないものを題目語にしたり、それを規定したりするばあい、(c)③のばあい(準備としてするばあい)

高橋の研究を発展させ、より詳細な分類を行ったのが吉川(1973)である。吉川はテアルを動詞の性質によって5種類に分類した。その上で「[してある]全般にわたって、「が」をとることが多く、4.2から派生したもの(稿者注:対象が変化した結果の状態を表す「～テアル」のうち「準備」の意味を持ったもの)のうちに、比較的多く「を」をとるものを見いだすにすぎない、とだけ言える」(p. 266)と論述している。

高橋や吉川は、テアルに複数の用法があることを認め、「準備」の意味を帯びるときに「対象ヲ～テアル」の現れる傾向があることを指摘した。両者は、先に意味分類をして、次に形式の違いに向かうという分析手法を取っている。

これに対して、森田(1977)では、両者の形式的な違いから意味の違いを説明しようとした。

～ガ他動詞テアル……行為の結果の現存

～ヲ他動詞テアル……前もって準備、結果の蓄積

森田の方法を敷衍してさらに詳細な意味記述を行ったのが益岡(1987)で

ある。益岡はテアル構文を統語的に大きくA型とB型の2つの類型に分け、各類型をさらに2つに細分した。

【形式】

A型:対象ガ ～テアル (動作主は抑制される)

B型:動作主ガ 対象ヲ ～テアル

【意味】

全体に共通する意味:意志的行為の結果に重点が置かれる「結果相」の表現

A₁型:行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプの表現

(6) 盆栽が幾鉢かならべてあった。(松本清張「張込み」)

A₂型:或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプの表現

(7) 新聞紙の半分ぐらいをさらに四つに切ったぐらいの切り抜きが折ってあった。(松本清張「地方紙を買う女」)

B₁型:行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、基準時において引き続き存在しているという、「結果の事態の存続」の意味が表される

(8) 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり……。 (井上靖「天平の甕」)

B₂型:単に、行為の結果が基準時(及び、それ以降)において何らかの有効性を示す、という意味での結果相を表す。対象の何らかの状態がその時点で存続している、といったことは、問題にされていない

(9) もちろん、天王山にむけてそれぞれの調整を指示してあります。(報知新聞1983.7.24)

益岡はテアルの意味を以上の4つに分類した上で、「テアル表現の全体像は、A₁型から、A₂型、B₁型を経てB₂型に至る、1つの連続体を構成している」(p. 232)と指摘している。この「連続体」という捉え方を導入したところに益岡の特徴がある。

3. 本稿におけるテアル構文の捉え方

本稿の特徴は、第一に、「テアル」自体は単一の意味を持ち、それが特定

の描写文に使われたとき、その描写文の構文的特性とテアルの意味が複合して「テアル構文」の意味を形成すると考えた点にある。

第二の特徴は、「テアル自体の意味」において「意志性」を省いた点にある。テアル構文には非意志的な行為によるものも存在し、必ずしも意志的行為の結果を表すとは言えない。「意志性」はテアル固有の意味ではなく、構文の特性に由来していると考えられる。

第三の特徴は、A型とB型を使い分ける基準として、「話し手の視点」を導入した点にある。話し手の視点がある位置に立つとA型となり、別のある位置に立つとB型となる。そして話し手の視点がどちらの位置に立っているとも取りうる場合を接点として、両者は連続していると考えられる。

4. テアル構文の2類型

本稿ではテアル構文を次のように分類する。

・テアル自体の意味：行為の結果に重点が置かれる「結果相」の表現

・A型：対象ガ～テアル（動作主は抑制される）

意味…行為の結果もたらされる対象の存在や変化を表す

(10) そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。(宮沢賢治「注文の多い料理店」)

・B型：動作主ガ（対象ヲ/ニ/ト）～テアル

意味…行為の結果が何らかの有効性を示すことを表す

(11) 私は健康のため体を鍛えてある。

A型は情景描写文の一種で、話し手は動作主の行為よりも対象の存在・変化に関心を持つ。

B型は行為描写文の一種で、話し手は対象の存在・変化よりも動作主の行為に関心を持つ。結果の「有効性」にはしばしば「準備・目的」の意味が付随し、その場合、「動作主ガ～シテオイタ」に近い意味を表す。

A型とB型は典型的には上の意味を表すが、形式と意味が完全に1対1に対応しているわけではない。話し手が情景描写と行為描写の中間的な描写を行ったとき、形式と意味の間にゆれが生じる。

5. 動詞の性質

5-1 A型に使われる動詞とB型に使われる動詞

先行研究では、しばしば動詞の性質とテアル構文の類型について論じら

れ、各類型によって取りうる動詞の性質に違いのあることが指摘されてきた(吉川1973, 森田1977, 寺村1984, 益岡1987など)。そこでは特に動詞の「意志性」が問題にされていた。そこで稿者は『日本語基本動詞用法事典』にある動詞を含む1020語を使い、当該動詞が「意志形(シヨウ)」「命令形(スルナ)」「禁止形(シロ)」になるかどうかを調べてみた(表1を参照)。

まずA型から見ていこう。この種のテアル構文は、話し手が対象の存在・変化を察知し、その情景を描写する表現である。そのため表1の[A][B]に示されるような「影響性」の高い動詞が使われる。[C]の動詞は(12)に示されるように、通常A型のテアル構文としては使われにくい、「対象」の変化が察知されやすいような場面では(13)のように適切な文となる。

(12) おや、庭の松の木がなでてある。

(13) おや、ほこりだらけだった狸の置物の頭がなでてある。

「対象」の変化は通常「視覚」によって察知されることが多いため、先行研究ではしばしば「視覚」ということが強調されてきたが、視覚以外の感覚の関わる場合もある。

(14) 彼の部屋はいつもクラシックがかけてある。(聴覚)

(15) 彼女の部屋はいつも香が焚いてある。(臭覚)

(16) 韓国の料理は唐辛子味が付けてある。(味覚)

(17) この家の床は滑って転ぶほどツルツルに磨いてある。(触覚)

(18) ○○神殿には得体の知れない雰囲気（心）が漂わせてある。

A型は「視覚」に限らず、話し手が五感及び心によって対象の変化を察知した場合に使われるのである。

A型で注目したいのは、表1[A]の動詞などで表される、非意志的行為の結果を表す表現の存在することである。次の表現を見てみよう。

(19) あっ、あそこに卵が産んである。

(20) おや、机の上にカバンが忘れてある。

(21) 電話ボックスに入ったら、サイフが置き忘れてあったんだよ。(TV番組「はぐれ刑事純情派スペシャル」の台詞1995.10.11)

(19)の動作主は動物であるが、それが意志的に卵を産んだという意味はない。話し手の関心は、動作主の「産む」という行為ではなく、眼前にある「卵」の存在にある。(20)の「忘れる」は影響性が高く、(21)の「置き忘れる」と同じ内容を表す。[H]の「忘れる」ではなく、[B]の「置く」に近い意味を表す。両者の違いは、「置き忘れる」が無意志的行為しか表さないのに対し、

表 1

	意志形	命令形	禁止形	コントロール	A・B型	動詞	
テアル形になる	ならない			不可能	↑A型になりやすい B型になりやすい↓	(卵を)産む、(エサを)つ いばむ、(置き)忘れる	A
						置く、書く、開く、作る、買 う、並べる、壊す	B
						なでる、読む、見る、生かす、 呼ぶ、教える、覚える、歌う	C
	なる	なる	なる	可能		着る、脱ぐ、浴びる	D
						争う、結婚する、触る、昇る、 通う、親しむ、協力する、反 対する、歩く、走る、行く、 座る、寝る	E
テアル形にならない				可能		待つ	F
						生活する、暮らす、生きる、 成長する、死ぬ、いる	G
	なる	なる	なる	不可能		信じる、信仰する、感じる、 思う、尊敬する、喜ぶ、知る、 忘れる	H
						笑う、泣く、怒る	I
				可能		おっしゃる、召し上がる、な さる、下さる、くれる	J
						鳴く、吠える、さえずる、は ばたく	K
				不可能		間違える、誤解する、悩む	L
	ならない					口走る、(笑いか)噴き出す、 なくす、はやまる	M
		ならない				見かける、出会う、見える、 聞こえる	N
			ならない			咲く、降る、照る、光る、氷 る、流れる、灯く、故障する、 ある、いる (存在)	O

「置く」は意志的行為も無意志的行為も表すという点にある。

(2) おや、娘に持たせたはずの弁当が家に置いてある。(わざとやったんだな。/うっかりしていたんだな。)

「つけっ放す」「散らかしたままにする」のような表現も、場面によっては無意志の行為を表す。

(23) おや、ガスがつけっ放しにしてある。消し忘れが多いな。

(24) おや、おもちゃが散らかしたままにしてある。片づけ忘れたな。

(23)(24)は動作主の意志とは無関係に「うっかり」なされた場面で使われた文である。「すべき処置を怠った」という文脈においては、「意志性」のないテアル構文が成立する。

次にB型を見ていこう。この種のテアル構文は、行為の結果の何らかの有効性を描写する表現であり、「意志性」の伴うことが多い。「行為」というものは通常意志的に行われるためである。その場合しばしば「準備、目的」の意味が付随する。たしかに表1の[B]～[E]のような「意志形」「命令形」「禁止形」になる意志性の高い動詞は使われるが、どの形にもならない[N][O]のような意志性の低い動詞は使われない。[H][I][K][M]は、「意志形」「命令形」「禁止形」のうち一つあるいはいくつかの形は取るものの、その意味は「～スル(シナイ)ヨウニツトメヨウ」といったもので、動作主のコントロールの及びにくい動詞であり、テアル形にならない。

しかし、B型にも「意志性」のない表現が存在する。

(25) 見ましたら卵をだいぶうんでありましたのでふびんに思って許したのです(手塚治虫「平原太平記」)

(26) おや、ガスをつつけっ放しにしてある。

(25)において話し手は眼前の卵の存在を描写するとともに、卵を産むという行為にも関心を示している。この場合「有効性」は動作主の意図によるもの(目的)ではありえず、話し手が状況から判断したものとなる。(26も同様。)(25)(26)のような無意志のテアル構文には、[A][B]のような影響性の高い動詞が用いられる。これは情景描写も行うという点で意味的にA型の(19)(23)などの表現と連続している。

[F][G][J]は動作主のコントロールが及びやすいにも関わらずテアル形にはならない。これについては拙稿(1995a, 1996)で考察した。ここでは紙幅の関係上その一部を論じるにとどめておく。

[F]の「待つ」はアスペクト的な意味が原因でテアル形にならない。B

型は、行為の終了後にその行為の結果の有効性を示す時点が想定されねばならない。たとえば「歌う」は「カラオケ大会に出場する」など、後続する場面が想定できればテアル形になる。「待つ」も「誰かと会う」とか「平和な時代を向かえる」などの場面を想定することができるが、「待つてある」という形式は不自然である。

その理由は、「歌う」と「待つ」とでは同じ「有効性」といっても違いがあるからである。前者ではその行為の終了した後も、まだその有効性は効力を発揮していない。そのため行為の終了から効力が発揮されるまでの間を表すアスペクト表現が必要となる。それに対して後者では、行為の終了と同時に効力も発揮される。たとえば「誰かを待つ」という行為ならば、誰かと会った瞬間にその目的も達成されてしまう。「待つ」にテアル形がないのは、待つ後の結果の有効性を表す必要がないからである。(図1を参照)

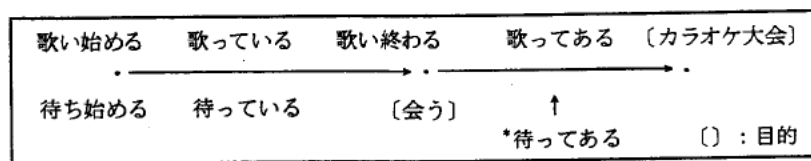


図 1

[J] は話し手以外の人物が動作主になる動詞である。拙稿(1995b)で考察したように、B型の動作主は話し手及び話し手の領域に含まれる人物しか動作主になれないという人称制限がある。そのため意志性があってもテアル形になりにくいものと考えられる。(6節を参照)

5-2 意志性のないテアル構文

これまで多くの研究で、テアル構文は「意志的行為」の結果を表す表現であるということが指摘されてきた(高橋1969, 森田1977, 寺村1984, 益岡1987, 大場1995など)。これは次に挙げるような表現の存在による。

(27) さっき樵がいた場所に、松の木が倒してある。

(28) *台風のと松の木が倒してある。

(27)は動作主である樵に意志性があるため適切な文となり、(28)は台風に意志性がないため非文になると説明されるのである。

しかし、大場(1995)自身が挙げた次の表現のように、意志的な行為ではないものにテアル構文の使われることもある。

(29) (鞆の中になぜ手袋が入っていたのかときかれて) これは礼装用のも

のを入れ忘れてあっただけですわ。(斉藤栄『鎌倉京都殺人事件』)

大場は(29)に対して、「なぜ、「忘れる」がテアル構文になりうるのかについてはよくわからない。ここでは、テアル構文の中で、「忘れる」だけが(非意志的であるにも関わらずテアル構文になりうるという意味で)特別な例であることを指摘するに留めたい」(p. 3)と述べている。

これに対して、本稿では(19)~(20)のような例が多数存在することから、これらを例外とは考えない。それならば、テアル構文全体の中で(19)~(20)のような表現はどのような位置づけにあるのであろうか。ここで注意したいのは、(29)の「忘れる」は表1 [H] の「忘れる」ではなく、[A]に含まれるべき「入れ忘れる」であるということである。これは「意志性」こそないものの視覚的に変化が察知できるので適切な文となる。

ここで(19)~(22), (29)の表現を眺めてみると、この種のテアル構文は本動詞「アル」に意味的に近いことが分かる(吉川1973, 益岡1992を参照)。

(30) あっ、あそこに卵が(産んで) ある。

(31) おや、弁当が(忘れて) ある。

益岡(1992)は、場所名詞との共起関係によってA型を2つに分けたが、本稿ではこれを敷衍してA₁~A₃の3つに再分類した。

A₁ (32) ここに本が置いてある。 ここに本を置いた。

A₁ (33) ここに線が引いてある。 ここに線を引いた。

A₂ (34) ここにビールが冷やしてある。 ?ここにビールを冷やした。

A₂ (35) ここに切り絵が切つてある。 ?ここに切り絵を切った。

A₃ (36) *頭に髪の毛が切つてある。 *頭に髪の毛を切った。

A₃ (37) *ここに窓が開けてある。 *ここに窓を開けた。

A₁は、テアル構文においても、本動詞が単独で述語になる場合においても場所名詞と共起する。この型には「置く」に代表される配置動詞と、「書く」に代表される書記動詞が使用される。これらの動詞は単独で存在の意味を表すという点でアルと近い関係にある。

A₂は、本動詞単独では場所名詞と共起しない。しかし、次の表現に示されるように、その背後に配置動詞が隠されており、A₁と意味的に近いことが分かる。そのため、A₃よりもアルに近い表現であると考えられる。

(38) 冷蔵庫にビールが冷やして(入れて)ある。

(39) ここに切り絵が切つて(置いて)ある。

A₃は、単独で述語になるときに場所名詞と共起しないばかりか、テアル

構文においてもそれとの共起を許さない。アルに含まれる存在の意味が弱まり、本動詞の意味が強く構文に影響しているためであると考えられる。以上、ここでは場所表現との共起関係からA型を3つに分けることができた。

ここで先の意志性の問題に戻ろう。アルは単に対象の存在を描写する無意志動詞である。それに対しA₁型のテアル構文は、対象が「どのように」存在するのかにまで言及した表現である。その存在は動作主の行為によるものであるが、動作主に意志があったかどうかは問題とされていない。

(27)の「倒してある」に意志性が入るのは、それがA₃で意味的にアルから離れており、かつ無意志で木を倒すという場面が想定しにくいからである。(28)が非文となるのは、主体が生物でなければならないという選択制限があるからである。A₁型のテアル構文は、存在文の一種としてアルと近接するという構文的特性により、無意志のテアル構文をも産出するのである。

また(23)(24)のようにアルと意味的に離れたものでも、「すべき処置を怠った」という文脈においては、「意志性」のないテアル構文が成立する。

6. 動作主の人称制限と話し手の視点

従来、テアル構文の動作主には、以下に引用するように一定の人称制限のあることが指摘されている(森田1977, 寺村1984, 益岡1987, 1992など)。

①の「てある」表現(稿者注: ~ガ~テアル)の行為主体は必ず素材たる第三者で、話し手や聞き手は行為者とはなりえない。(中略)

②(稿者注: ~ヲ~テアル)は(中略)必ず“だれそれは”という主体者が主語として現れる。この「~ハ」主語にはふつう人間が立ち、それも話し手か聞き手となることが多い。(森田1977. 52-53より引用)

たしかにA型である①(10)は第三者が動作主となり、B型である②(11)は話し手が動作主となっている。しかし、次のような表現が存在するように、各類型は必ずしもそのような人称に制限されているわけではない。

(40) ここにちゃんともう親あてに手紙がかいてあるんだフフフ(手塚治虫「バンパイヤ」)……A型で話し手が動作主となる

(41) あにき長者はものすごいケチなんだぜ どっかたべものをかくしてあるんだよ(手塚治虫「どろろ」)……B型で第三者が動作主となる

本稿で強調したいのは、テアル構文に一定の人称制限が見られるのは、構文の特性に由来しているということである。A型は話し手が観察者の視点に立ち、眼前の情景の存在・変化を発見して、それを描写する表現である。

話し手が自分自身の行為の結果を新たに発見するという場面は、通常想定しにくい。A型の動作主は「他者」となりやすい。しかし自己の行為による情景であっても、それを客観的に眺めているという場面では、(42)のような表現が成立する。

(42) 今改めて眺めると、私の部屋って本当に和風なのね。床には畳が敷いてあるし、その上に和筆筒と机も置いてあるわ。それに床の間には掛軸だって掛けてあるわ。

一方、B型は話し手が動作主の視点に立ち、その行為の結果の有効性を描写する表現である。その「有効性」は抽象的なものなので、通常話し手は自分自身の行為によるものしか感じ取れない。

(43) 私は彼にネックレスをもらってある。

(44) 彼はうちの娘にネックレスを(*もらってある/*くれてある)。

しかし、話し手が動作主を自分の領域にあると捉え、その者の視点に立ちやすい状況であれば、(45)のような表現も成立する。

(45) うちの娘は彼にネックレスをもらってある。

ここで特に注目したいのは、次のような表現の存在である。

(46) このとおりわしのゆいごん状もちゃんとつくってある。(手塚治虫「バンパイヤ」)

(47) 番頭は、待たせてある車を呼んで、二人を乗せ、ドアを外からしめて、おじぎをした。(松本清張「ゼロの焦点」)

(46)における話し手の発話意図は、聞き手の視点から眼前の情景を描写するとともに、動作主である自己の視点からその行為の結果を描写することにもある。いわばその中間的な描写をしているのである。そのため「~モ」は「~ガ」とも「~ヲ」とも置き換えが可能である。(47)のようにテアルの対象が被修飾語の場合、形式的にA型とB型の区別がつかない。こうした場合、話し手の視点に着目するとよい。(47)は番頭を動作主と捉え、その「待たせた」という行為の結果を描いたとも、番頭を観察者と捉え、その眼前の「車」の情景を描いたとも解釈できる。結局、以上のような表現を接点として、A型とB型は連続体をなしていると考えられる。

参考文献

- (1) 大場美穂子(1995)「「~てある」について」第八回日本語文法談話会でのハンドアウト

- (2) 杉村泰 (1995a) 「テアル構文の研究」1994年度名古屋大学修士学位論文
- (3) —— (1995b) 「テアル構文における動作主の人称制限と話し手の視点」『ことばの科学』8: 33-50
- (4) —— (1996) 「テアル構文の意味分析—その「意図性」の観点から—」『名古屋大学人文科学研究』25 (近刊)
- (5) 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」金田一春彦 (編), (1976) 『日本語動詞のアスペクト』: 117-153. むぎ書房
- (6) 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- (7) 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- (8) —— (1992) 「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて—」文化言語学編修委員会 (編) 『文化言語学—その提言と建設—』532-546. 三省堂
- (9) 森田良行 (1977) 『基礎日本語』角川書店
- (10) 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦 (編), (1976) 『日本語動詞のアスペクト』: 155-323. むぎ書房

(北京第二外国語学院)